トゥルーエンディングにたどり着くまでループするらしいですよ。

諒一

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「起きてください」

女の子の声がする。

僕は一人暮らしをしているから気のせいだと思いそのまま寝続けようとすると、顔を叩かれる。

夢では無いことに気が付くと目を開けるすると緑色の髪の（物理的に）小さな女の子がいた。

「あ、起きましたね。はじめまして、私はあなたの案内兼特殊サポート妖精のナビです」

ナビからいろいろと説明を聞いた。

とりあえずこの世界はゲームの世界で魔王を倒すとゲームクリアになるらしい。

「じゃあ、トゥルーエンディングを目指して頑張りましょう！」

目次

一周目
一周目の終わり　1
一周目設定　7
二周目
二周目の始まり　11
聖剣祭前日　15
聖剣祭当日　19
天才魔法使い　23
魔王復活　28
帝国　31
シオン　35
風の試練1　38
風の試練2　42

一周目
一周目の終わり

瓦礫の山の側に僕は座っていた。近くには、この世界に来た時から一緒にいる妖精のナビ。
「ごめん、ナビ」
僕は、ナビに謝る。
「どうしたんですか？　急に」
「どう考えたってこの状況はバッドエンドだし。今までずっとサポートして貰っていたのに、こんなことになってしまったのはやっぱり僕が優柔不断だったからだと思うんだ」
「そんなことないですよ。ショウマさんは一生懸命やって来たじゃないですか」
ナビは僕の膝の上に降りながら、話を続ける。
「ショウマさんの努力は私が知っています。あまり自分を責めないでください」
ナビは僕の目元に手を伸ばして涙を拭ってくれた。いつの間にか泣いていたようだ。
「ありがとう」

「では、出発しましょうか」
　ナビはいつものように僕の頭の上に乗る。
「何処に行くの？」
「最後の目的地です」
「ちょっと待って。先にみんなのお墓を作ってもいいかな？」
「オッケーです。あっちの方に海の見える丘が有りますよ」

　丘までやって来た。綺麗な海が見える。
「うん。ここに作ろうか」
　お墓と言ってもみんなの死体は残っていないので、残っていた装備品を使ってお墓の代わりにした。
　４人のお墓が完成した。ナビと二人で手を合わせた。
「やっぱり後悔していますか？」
「そうだね。もっと僕が強ければとか、あの時こうすれば良かったとかいろいろ考えてしまうよ」
「そうですか」
「ここで立ち止まっていたら、みんなに怒られちゃうよ。そろそろ行こうか」

「はいです。とりあえずあっちに向かってください」
　ナビの案内に従って進むことにした。

「こんなところに洞窟なんてあったっけ？」
「魔王城が崩れたので、一緒にここの封印も解除されたんです」
「え？　もしかして隠しダンジョンだったりする？
　聖剣は折れたから武器持ってないよ」
「大丈夫ですよ。ここにはモンスターは出てこないはずですから」
　ナビの言うことを信じてそのまま進む。
　特に何も起こらずに奥までたどり着いた。
「この扉を開けると後戻りは出来ませんよ。覚悟はいいですか？」
「もっと早くに言って欲しかったよ。あとなんでそんなに嬉しそうなんだよ」
「まぁまぁそんなことはどうでも良いじゃないですか」
「わかったよ。やり残したことは多分無いから大丈夫。開けるよ」
　扉を開けて部屋に入る。
　振り返ると扉はなくなっていた。
「本当に帰れないんだね」

「私は嘘つきませんよー」
　部屋の中心には水晶玉が置かれていた。
「この部屋はですね、なんと二周目に引き継ぐ物を設定する部屋なのです」
「へ？」
「だから、引き継ぎの設定をして二周目に行きましょう」
「え？　二周目があるの？」
「ありますよ。最初に言ったじゃないですか。トゥルーエンディングを目指しましょうって」
「いや、確かに言ってたよ。けどね普通二周目があるとは思わないよ」
「そうですか？　でもこの部屋に入ったので二周目に行かないとここから出られませんよ」
「ちなみに次の周もダメだったら？」
「その時は三周目、四周目と続きます」
「トゥルーエンディングまでループするのか」
「はいです。じゃあ設定をしましょうか」
　水晶に手を伸ばすと引き継ぎ設定と文字が浮かび上がる。
　どうやらポイントを使って引き継ぎをするみたいだ。

「このポイントは何のポイントなの？」
「モンスターを倒した時に入ったポイントですよ。どのモンスターからどれだけ入手出来るかは秘密ですよ。ちなみに魔王からも貰えてますよ」
「この記憶引き継ぎっていうのはもしかして？」
「そうですよ。この週の記憶の引き継ぎです。取るのをオススメします。一周目の気分でやりたいのなら取らなくてもいいですけど」
「いや、さすがにこれは取るよ。あとは、ナビ引き継ぎ？」
「それは、私の記憶引き継ぎですね」
「じゃあこれも取っておかないとね」
　他にも、レベル引き継ぎやアイテム引き継ぎを取ると、ポイントはほぼゼロになった。
「こんな感じかな」
「いいと思いますよ。じゃあ二周目に行きますよ。心の準備はいいですか？」
「うん。いつでもいいよ」
「では、行きます」
　ナビがそう言うと同時に足元の床がなくなった。
「落とし穴なら先に言ってくれよ！」
「私飛べるので忘れてました」

「絶対嘘だろそれ」

そのまま意識がなくなっていった。

一周目設定

主人公
名前：ショウマ（翔馬）
性別：男
年齢：１６
職業：勇者
見た目：黒髪黒目、身長は１６５㎝、体重５８kg
設定：高校に入学と同時に一人暮らしを始めた。
性格はよく言えば慎重、悪く言えば優柔不断。
何故かゲームの世界の主人公の位置になり、トゥルーエンディングを目指すことになった。
魔法が使えないと知り少し落ち込んだ。
妖精
名前：ナビ
性別：女

年齢：1
職業：案内兼特殊サポート
見た目：緑髪ショート青目、背中に半透明の翅が6枚生えている、身長は16㎝、体重0．3kg
設定：主人公の手助けをするために神が作り出した妖精。そのため世界地図が頭の中に入っている。
名前の通りに場所を尋ねるとそこまでナビゲーションしてくれる。
性格は面白いことが大好き。基本的に丁寧な口調で話す。
道案内だけでなく引き継ぎなどの特殊なサポートをしてくれる。
主人公をからかうことが好きなので直前まで必要なことを教えないこともある。
主人公の頭の上がお気に入り。
一周目の世界
サブイベントや仲間イベントを全くせずにメインイベントのみをやって来た結果、仲間は全滅してしまったが魔王を倒すことは成功した。世界は平和になった、しかし失ったものはとても大きかった。魔王と戦ったあとの勇者の行方を知るものは誰もいない。
ｂａｄｅｎｄ１脇目も振らずに駆け抜けた結果。
引き継ぎ項目

・記憶引き継ぎ　５０
・レベル引き継ぎ　１００
・仲間レベル引き継ぎ　１０００
・アイテム引き継ぎ　５０
・ナビ引き継ぎ　５００
・レベル限界突破　１０００
・仲間レベル限界突破　１００００
・ステータス限界突破　１０００
・仲間ステータス限界突破　１００００
・魔法才能付与　１０００
・魔法引き継ぎ　１００
・ボーナス魔法　５０００
・聖剣グレードアップＬＶ１　１０００　ＬＶ１選択後選択可能
・聖剣グレードアップＬＶ２　１５００　ＬＶ２選択後選択可能
・聖剣グレードアップＬＶ３　２０００　ＬＶ３選択後選択可能
・聖剣グレードアップＬＶ４　２５００　ＬＶ４選択後選択可能
・聖剣グレードアップＬＶ５　３０００

・???引き継ぎ　５００　条件未達成のため選択出来ません
・???引き継ぎ　５００　条件未達成のため選択出来ません
・???引き継ぎ　５００　条件未達成のため選択出来ません
・???引き継ぎ　５００　条件未達成のため選択出来ません

使用可能ポイント　８００

二周目に引き継ぐ物

・記憶
・レベル
・アイテム（お金を含む）
・ナビ

使用ポイント７００
残りポイント１００
次の周の引き継ぎ時に使用可能

二周目
二周目の始まり

目が覚めた。
「おはようございます。ショウマさん」
「おはよう。ナビ」
ここはナビと初めて出会った部屋のようだ。
「無事に二周目になったので、二周目の特典について説明しますね」
「だからそう言うことは、もっと早く言ってくれよ」
「細かいこと気にしているからハゲるんですよ」
「ハゲて無いから！　はぁ、もういいからその特典の説明をお願い」
二周目の特典を説明して貰った。
・イベントの追加
・隠しダンジョンの解放
・難易度ノーマルの解放
の三つが特典らしい。

「ノーマルってことは一周目はイージーだった？」
「そうですよ」
「マジか。難易度ってエンディングに関係ある？」
「ありますよ」
「イージー、ノーマルって来たらハードもあるよね」
「当然ですよ」
「この周でトゥルーエンディング無理じゃないの？」
「はい」
「あっさり言ったな！」
「難易度はイージーをオススメしますよ。ショウマさんまだ弱いので」
「スルーしたな。わかっているよ。僕が弱いことぐらい」
難易度の変更はここでしか出来ないらしい。
ナビの言う通り今回は難易度の変更をしないで行くつもりなので、最低でも四周することが確定した。
「最初はとにかく強くなれるように、ギルドの討伐依頼でも受けるかな」
「目指せ冒険者ランクＡですね！」
「ランクＦの僕には高過ぎる目標だよ」

冒険者のランクはA～Fまでの6ランクがある。ちなみにAは国に数人しかいないらしい。
「まぁ、Cランクぐらいまでは行きたいかな」
「レベル引き継ぎしているので、多分もっと上まで行けますよ」
「そもそも、レベルは見れないの？」
「修行が足りないんじゃないですか？」
「そういうのはいいから」
「見れませんよ。ここは現実で、ゲームじゃないんですから」
「ここゲームの世界だって言ってたよね！」
「ショウマさんはまだまだレベル限界は遠いですよ」
「それはなんとなく分かるよ。まぁいいや、他にこの部屋でやっておくことは何かある？」
「ありませんよ。では新たな冒険に出発ですよ！」
「じゃあ、行こうか」
扉を開けて外に出る。
目の前には森が広がる。振り返ると扉はなくなっている。
「さて、まずは何処に行こうか？」

「やっぱり王都じゃないですか？　聖剣祭もありますし、ショウマさん武器何も持っていないじゃないですか」
「最初はその辺の石を拾って使っていたっけ。よし、王都に行くか。ナビ案内よろしく」
「はいはーい、えっと……あっちです」
　ナビは僕の肩から頭の上に移動しながら、案内を始める。
「聖剣祭はいつ始まるの？」
「三日後ですよ」
「そっか、まぁ急いでも仕方ないしのんびり行こうか」
　僕はナビの案内に従って歩き始めた。

聖剣祭前日

二日かけて王都にたどり着いた。
「とうちゃ～く」
「案内お疲れ。やっぱり王都はデカイな」
祭りは明日からだが、既にお祭り騒ぎである。
「今のうちに聖剣祭の参加登録しておこうか」
「あっちの方に受付が有るみたいですよ」
受付と書かれた看板が見える。あと、並んだ人の奥の方に小さく見える最後尾の看板が。
「結構並んでいるなー。暇だし並ぶか」
「どのくらいかかりますかねー？」
「ただの受付だから３０分ぐらいかなぁ」
そんな声が聞こえたのか、前に並んでいるスキンヘッドのおじさんが振り返る。
「なんだ兄ちゃんは知らねぇのか。何でも今年から性格をある程度調べられるらしいぞ。あと1時間ぐらいはかかるんじゃねぇか」

「そうなんですか。何かあったんですか？」
「前の祭の時に剣が抜けなくて、魔法を発動させたバカが出たんだよ」
「ああ、なるほど。確かにそんなことがあれば性格の確認ぐらいするようになりますね」
「話変わるけどよ、兄ちゃん受付まで暇だろ？」
「ええ、まぁ暇ですね」
「兄ちゃん、この祭は初めてだろ。俺がいろいろ説明してやるよ」
そう言っておじさんは、祭や聖剣について説明を始めた。

「おっと、どうやら俺の順番が来たようだ。楽しかったぜ、兄ちゃんじゃあな」
嘘か本当かわからないような聖剣の都市伝説まで話したところでおじさんの順番が来た。
「あのおじさんが聖剣大好き、ということしか伝わらなかったな」
「やっぱりハゲよりもショウマさんの頭の上ですね」
話の途中で暇になったのか、おじさんの頭の上に行っていたナビが戻ってくる。
「僕以外に見えたり、触られたりしないからってあんまり遊ぶなよ」
「迷惑はかけてませんよ」
「僕は見えるから気になるんだよ」

「あっ！　ほら順番が来たみたいですよ」
受付の建物に入る。
どうやら、一対一の面接形式で受付をやっているようだ。

いくつかの質問に答えると、問題は無かったみたいで受付が終わったと告げられた。
「よし、次は宿を探すか。この二日間テントだったから、ベッドで寝たい」
「今から探すんですか？　空いてる場所ありますかね」
「せっかくだから高級なところにするか、お金は引き継ぎのおかげでたくさんあるし」
「じゃあ、あそこですね。一泊金貨5枚の王国プレミアムホテル」
ナビに案内して貰い、ホテルに着いた。
部屋の空きは有るみたいなので、ここに泊まることにした。
ご飯は別料金らしく、1食金貨1枚だった。夜と朝の分で合計金貨7枚を支払った。
「めちゃくちゃ高いなここ。普通のところだったら、
ご飯付き銀貨5枚で済むよな」
「高いだけあって良い場所じゃないですか。ほらお城が見えますよ」
「夜だから暗くて何も見えないけどね。そろそろ僕は眠るよ。おやすみ」
「おやすみなさーい」

明日の聖剣祭を少し楽しみに思いながら、僕は眠った。

聖剣祭当日

聖剣祭当日となった。
「よし。そろそろ出発しようか」
僕は、聖剣祭に参加するためにホテルから出発をした。
昨日受付で言われた集合場所、通称聖剣広場に向かう。
「そう言えば、なんで前は聖剣祭に参加しなかったの？」
一周目の時は、あと1ヶ月ぐらい後に来て聖剣を抜くだけ、という祭とは言えない感じの時に抜いたからな。
「実はまだ魔王が復活していないので、一周目のショウマさんはまだ勇者として覚醒していないんです。なので、聖剣祭に来ても聖剣は抜けません」
「え？　それって今回聖剣抜けるの？」
「二周目なので、ショウマさんは勇者として覚醒したままです。だから大丈夫ですよ……多分」
「すごく不安なんですけど」
聖剣広場に着いた。

「たくさん人がいますねー」
「あれだけの人に見られながら聖剣を抜きに行かないといけないのか」
「抜けたら、顔と名前を覚えて貰えるじゃないですか」
「それが、嬉しくないんだよ」
「あっちに集まっているみたいですよ」
　５０人ぐらいが集まっていた。
「昨日の並んでいた人に対して少なくない？」
「性格が悪かったんですよ、きっと」
「昨日のおじさんいないね」
「ハゲでしたから」
「ハゲは絶対関係ないだろ」
　昨日の受付のお姉さんが居たので声をかけると、もうすぐ説明が始まるとの事だった。
　どうやら僕が最後だったようだ。部屋に入ると説明が始まった。
　簡単に言うと、挑戦するのは一回、ダメだったらすぐに諦めるということだった。
　僕の順番は最後だった。すぐに順番になると思い近くの椅子に座る。

「１０分は早く来たのに、なんか遅刻したみたいになってたね」
「遅れてないから良いんじゃないですか。ちょっと様子見てきますね」
「うん。いってらっしゃい」
ナビは聖剣の方に飛んで行く。

そのまま座って待っていると順番が来たようだ。ナビはまだ帰って来てないけど、大丈夫だと思い進むことにした。
聖剣の前まで来たけど、ナビは見当たらなかった。とりあえず今は剣を抜くことにしよう、と思い剣を握り引き抜く。
普通に抜けた。すると光がキラキラと降ってくる。上を見ると、ナビが魔法を使っていた。
「神が勇者を祝福しているんだ！」
「神に祝福されし勇者だ！」
誰かが叫んだ。歓声が上がり出す。
ナビが戻ってくる。
「いやー、盛り上がりましたねー」
出来れば何もしないでいてほしかった。

勇者コールはしばらくの間続いた。
「やりましたね。計画通りですよ」
「僕は目立つの嫌だって言ったし、そんな計画頼んでないよ」
「ショウマさんの二つ名は、祝福されし勇者（笑）ですね」
こうして僕は、祝福されし勇者（笑）となったのだった。

天才魔法使い

聖剣を抜いてから一週間がたった。
王様に呼ばれて城に行って、王様に勇者として認められた。おかげでいろいろな人から声をかけられるようになった。一週間たって少しは落ち着いたと思う。
今僕は王様の依頼で、とある魔法使いの所に向かっている。
「名前は教えて貰えなかったけど、絶対あの人だよね」
「そうですね。あの人でしょうね」
天才アルベルト。この世界で唯一の転移魔法が使える人物。見た目はボサボサの赤い髪、常に仮面を着けていて顔は分からない。身長は僕よりも１０㎝ぐらい高い。
一周目では、一緒に魔王と戦った仲間の一人である。
ちなみに前回は魔界に入る時に仲間になった。
「結構山奥まで来たと思うんだけど、あとどのぐらいか分かる?」
「そろそろ見えてくると思いますよ。……ほら!　あれですよ」
ナビが珍しく自分で飛びながら指を指す。
洞窟が有った。アルは洞窟に住んでいたのか。洞窟に向かって進む。

「そっちじゃなくてこっちですよ」
「あの洞窟じゃないの？」
「違いますよ。いいからこっちに来て下さい」
　ナビの方へ行くと、遠くからは見えなくなるような魔法を使っていたらしく突然屋敷が現れた。
「デカイね」
　屋敷に近づくと中から老執事が出て来た。
「ショウマ様ですね。こちらへどうぞ」
　執事さんの案内に従って行くと応接間の様なところに着いた。
「アルベルト様が中でお待ちです。どうぞお入り下さい」
　部屋に入る。
「やぁ、待っていたよ。俺はアルベルト。アルって呼んでくれ」
　そこには燃えるような赤い髪のイケメンがいた。
　ボサボサ頭じゃないし仮面も着けていない。
「……ショウマです。よろしくアル」
「うん。よろしく。早速だけど本題に入ろう。王様から手紙を貰って来てるよね」
「これだね。はい」

手紙を手渡す。
すぐに読み始めるアル。
「……なるほどね。返事を書くから少し待っていて貰ってもいいかな？」
「いいよ」
「ありがとう。ちょっと行ってくる」
部屋を出ていくアル。
「なんか性格違うよね。仮面は着けていないし、身だしなみは整えているし」
「いろいろ有ったんじゃないですか？」
少なくとも僕が知っているアルは爽やか系イケメンではなかった。
「考えても答えは分からないですよ」
「そうだね」
しばらく待っているとアルが戻って来た。
「お待たせ。これをお願い」
アルは手紙を僕に渡してきた。
「分かった」
「俺もちょっと用事があるから王都まで一緒に行こう」
どうやら転移魔法を使ってくれるみたい。

「ありがとう。助かるよ」
「此処まで来るの面倒くさかっただろ。そのお詫びだよ。ちょっと準備して来るから先に外に行ってて」
外に出てアルを待つ。
「王様の手紙は何が書かれていたのかな」
「まだ魔王は復活していないので、魔王の事では無いことは確かですね」
「今思ったけど王都に行くなら自分で手紙を渡せばいいんじゃないかな」
「王様の事嫌いなんじゃないですか」
アルがやって来た。
「準備はいいかい？」
「いつでもいいよ」
「じゃあいくよ。『転移、王都』」
特に衝撃等もなく一瞬で王都に移動した。
「到着と。問題は無いか？」
「うん。大丈夫」
「よし、じゃあ俺行くよ。またな」
そう言ってアルは行ってしまった。

「僕らも行こうか」
お城に向かって歩き始めた。

魔王復活

アルの手紙を王様に渡してから2週間が過ぎた。
この2週間、ギルドで討伐系の依頼を受け続けていたらランクが2つ上がってDランクになった。
「こんなに簡単にランクって上がるものだっけ？」
「強い人には強いモンスターを倒して欲しい、ということですよ。ランクが上がらないと依頼を受けられませんからね」
「なるほどね」
ちゃんと理由があったらしい。
「本当はゲームだからなんですけどね」
「ちょっと納得していたんだけど！」
ナビからイタズラされながら移動を続け、ギルドに到着した。
ギルドで依頼を眺めていると、ギルドの職員から声をかけられた。
どうやらお城に急いで来るように言われているらしい。
お城に急ぐことにした。

「急用ってなんだろうね？」
「多分魔王関係だと思いますよ。いつ復活してもおかしくない時期ですから」
お城に到着するとすぐに王様の所に通された。
簡単にいうと、王様から魔王が封印を破って復活したから倒して欲しいとお願いされた。
準備をしたら王都を出発します、と返事をしてお城を出た。
「本当に魔王が復活したみたいだね」
「そうですね。まずはどこに行きますか？」
「うーん。……４つの隠しダンジョンが人間界にあるんだっけ？」
「そうですよ。５つある内の４つが人間界、残りの１つが魔界にあります」
「じゃあそのダンジョンに行ってみようかな。ちなみにどんなダンジョンなの？」
「火のダンジョンは火山、水のダンジョンは海、風のダンジョンは古代の塔、土のダンジョンは洞窟になっています。クリアするとそれぞれ火、水、風、土属性の特別な力を手に入れる事が出来ますよ」
「ここからは何処が一番近い？」
「水か土のダンジョンですね。ちなみに火と風は帝国が近いです」
海に行くか洞窟に行くかどっちかってことか。

「ちなみに隠しダンジョンには、それぞれの守護者がいてその人の許可を貰わないと入れませんよ」
「ダンジョンに行く気満々だったんだけど……まぁいいや。その守護者を探さないといけないわけだ」
「その通りです。誰から探します？」
「とりあえず水か土でお願い」
「水の守護者はアリアさんで、土の守護者はレオナルドさんですよ」
「その２人は、もしかして僕が知っているアリアとレオナルド？」
「はい。ちなみに火の守護者はアルベルトさんで、風の守護者はシオンさんですよ」
見事に１周目で仲間だった人達だ。
「守護者が誰かは分かったけど、許可って簡単に貰えるのか？」
「大丈夫ですよ。聖剣を持っているのである程度は楽になっているはずですので」
「場所が分かっているアルにとりあえず会いに行こうか」
守護者探しを僕は始めた。

帝国

アルの所に着いた。火のダンジョンに行きたいと言うことを伝えるとあっさり許可を貰えた。

そもそもこの屋敷を見つけられた時点で許可を出す条件を満たしているらしい。ナビの案内で見つけたので、なんかズルをしたみたいな気分。だけどアルには内緒にしておこうと思う。

アルから貰ったこのルビーのペンダントを持っていればダンジョンの扉が開くらしい。

今回も王都まで送ってくれるみたいなので、甘えさせてもらうことにした。

王都に着くとまたすぐにアルは何処かに行ってしまった。

他の人達の事を考えてみる。

アリアとレオナルドは冒険者をやっているから何処に居るか分からない。シオンは多分帝国に居るはず。

「とりあえず、帝国に行こうか」

「帝国ということは、シオンさんですか？」

「うん。闘技場に行けば会えると思うんだけど、どうかな？」
「いいんじゃないですか」
「じゃあ、ギルドで帝国に行くような依頼でも受けてから出発しようか」
「了解しましたー」
ギルドで探したら、商人の護衛依頼が有ったので受ける事にする。２日後出発のようだ。
旅の準備や近くの討伐依頼などをしていると出発の日になった。
帝国までの道は比較的に安全なので、護衛は僕一人だけのようだ。
商人のおじさんは、勇者が来てくれたことをすごく喜んでいた。まだ僕は、勇者として何もしていないので正直反応に困る。
何ヵ所か村や街によりながら進む予定なので、だいたい一週間かかって帝国に着くみたいだ。

特に何のイベントも起こる事なく、帝国に到着した。
商人のおじさんと別れて、依頼の報告をするために帝国のギルドへ向かった。
用事を済ませギルドの外に出る。もうすぐ日も暮れてしまうので、今日の所は宿を探

すことにする。
「闘技場の方に行くのは明日にして、今日はもう休もうか」
「はいはーい。私はふかふかの枕を希望しまーす！」
「分かったから髪の毛を引っ張らないでくれ」
　明らかに高級宿ですって感じの所を見つけたので中に入ってみる。受付の人にふかふかの枕を頼んだら一瞬不思議そうな顔をしたけれど、ちゃんと対応をしてくれた。
まぁ、一人しかいないのに枕をもうひとつ下さいとか意味不明だよね。
「明日、闘技場に行ってシオンに会えるといいんだけど」
「もしも会えなかったらどうします？」
「うーん。……とりあえず火のダンジョンに行ってみようかな」
「ちなみにあんまりのんびりしていると、魔王の極大魔法によって世界が崩壊します」
「えっ？　今それを言うの？　それでいつまで大丈夫なの？」
「だいたい今から1ヶ月ってところですね」
「魔界に行くまでに前は5日、魔界から魔王の所まで１０日ぐらいだったよね。……あと2週間ないじゃん」
「そうですよ。よく考えて行動して下さいね」
「分かった。今日はもう寝る事にするよ。おやすみ」

「おやすみなさい」

シオンが闘技場に居てくれる事を願いながら僕は眠った。

シオン

　朝になり、僕達は闘技場に向かった。
「シオンは居るかな？」
「あの人は一応真面目ですから、きっと居ますよ」
　闘技場に近付くにつれて人が増えてきた。
「やっぱり人が多いなぁ。みんなシオンを見に来ているのかな？　シオン強いもんな」
「いやー、そう言って貰えると嬉しいね。私もっと頑張っちゃうよ」
「うん。頑張ってね。……ん？」
　振り返って見ると、濃い緑色の髪の毛をポニーテールにしている少女がいた。どう見てもシオンだった。
「ありがとー。あれ？　キミ誰だっけ？　ちょっと待ってね、今思い出すから」
　思い出すも何も初対面のはずなんだけど。
「分かった！　この前一緒に犬を探したポチ君だね！」
「違うから！　初対面だよ。そもそもポチって犬の名前だよね」
「あれ？　そうなんだ。でもどこかで見たことあるような……あ！　神に祝福されし勇

者君だ！」
　まさか帝国にまでその二つ名が知られているとは。
「あーうんそれで合ってるよ。僕はショウマ。キミに用が有って探していたんだ」
「ショウマ君ね。……うん多分覚えた！　私はシオンよろしくねー。私のことは好きなように呼んでいいよ」
　多分覚えていないと思う。次に呼ぶ時は勇者君か黒髪君だな。前もなかなか覚えて貰えなかったから。
「よろしくシオン。で用件なんだけど、風の試練を受けたいと思っているんだ」
「そっか、キミ勇者だもんね。ちょっと待ってね」
　そう言ってシオンは鞄の中から小さな箱を取り出した。
「はいこれ。アル君からペンダント貰っているみたいだしあげるよ」
　貰った箱を開けてみる。中にはエメラルドのペンダントが入っていた。この調子なら他の二つもペンダントだな。
「ありがとう」
「頑張ってね。えーと……勇者君！　そろそろ行かないと遅れちゃうからもう行くね。またね！」
　手を降りながらシオンは闘技場に入っていった。

「やっぱり名前覚えて無かったね」
「シオンさんですから」
「それよりも、シオンってアルと知り合いだったんだね。知らなかったよ」
　あれ？　1周目ではアルの事、仮面の人って呼んでいたような……。まぁいいか。
「とりあえず、目的は達成しましたね。これからどうします？」
「出来れば風も火も攻略しておきたいけれど、ダンジョン攻略にどのくらい時間がかかるかにもよるんだよね」
「今のショウマさんなら多分そんなに時間をかけずに行けると思いますよ」
「そうなんだ。じゃあ風の方から行ってみようかな」
「それじゃあ、さっそく出発しましょう！」
　ここから南にある古代の塔に向かうことにした。

風の試練1

古代の塔にたどり着いた。
「遠くから既に分かっていたけど、この塔高過ぎじゃない？」
塔の上の方は雲に隠れてしまっていて全く見えない。
「風の試練は比較的簡単ですよ。ただ上まで登ればいいので」
「ゴールの正確な位置が分からないのはきついと思うんだけど」
「試練ですから。タイムアタックも出来ますよ。やります？　やりますよね。ショウマさんには拒否権ありませんので」
「拒否権が無いとか初めて聞いたんだけど！」
「当然ですよ。今思い付いたので」
「思い付きなの!?」
「そろそろふざけるのもやめて、真面目にやりましょうか」
最初から真面目にやってほしかった。
「まぁ、そんなに説明することは無いんですけどね。だって上まで登り続けるだけですから。ただゴールまでの距離は、挑戦する人によって変わりますけど。あと魔物は居ま

せん」
「魔物居ないんだ。てっきり魔物を倒しながら登るんだと思った」
「そもそも入口が閉まっているのに魔物が居たらおかしいじゃないですか」
「言われてみれば確かに」
「じゃあ、中に入りましょうか」
「そうだね」
　僕は扉を開け……開かない。
「あれ？　開かないよ」
「何やっているんですか。横の台にペンダントを置いてから開けるんですよ」
「持っていたら開くわけじゃないんだね」
「そんなハイテクな物が付いているように見えるんですか？」
「ペンダントが鍵になっている時点で大分ハイテクだと思うけど……まぁ、確かに見た目は付いているようには見えないね」
　台にペンダントを置くと扉が自動で開く。
「やっぱりこの塔ハイテクなんじゃない？」
「細かいことは気にしない。それよりも扉を開いたので時間の計測が始まりましたよ」
「タイムアタックは本当だったのか」

とりあえず中に入る。目の前には大きな柱があり、左には階段があった。
よく見ると柱には、扉と上の矢印のボタンがあった。
「あれってエレベーターじゃないの？」
「エレベーターですよ」
「動く？」
「当然動きません。帰る時に使う物ですね」
「やっぱり動かないか。よし、登ろうか」
僕達は階段を登り始めた。

「螺旋階段だからちゃんと進めているのか分からなくなってくるよ」
「大丈夫です。ちゃんと進めていますよ。ちなみに今３０分経ちました」
「３０分も登っているのにまだ着かないのか。ちょっと休憩しよう」
階段に座る。
「あー座ってしまいましたね」
ナビの声と同時に階段が滑り台のようになった。

「え？　嘘だろ！」

そのまま止まる事なく入口まで滑り降りた。
「これは心折れるよ」
「ショウマさんなら大丈夫ですよ。頑張って下さい」
「簡単に言ってくれるね。……やるしかないか」
また階段を登り始めた。

風の試練2

階段を登っていると、エレベーターの扉が有るところにたどり着いた。
「ここは中間地点ですよ。エレベーターで下に行くことが出来ますよ。上には行けませんけど」
「あと半分か……ここまでどのくらい時間かかった?」
「えーと……約2時間ですね」
つまりあと2時間ぐらいでゴールか。
とりあえずエレベーターは無視して上に行くか。
「よし、進もうか」
「あれ?　エレベーターに乗らないんですか?」
「帰る時用なんでしょ。ナビが言ったよね」
「ショウマさんなら、ショートカットになると思って乗るとばかり」
「それで下まで降りたら、上には行かないって言ったじゃないですかとか言うつもりだったでしょ」
「そんな……完全にバレているじゃないですか。いつもだったら聞き逃しているのに」

「サポートが邪魔してどうするんだよ……じゃあ進むよ」
「はーい」

　登り続けていると階段の終わりに扉があった。
「あれ？　ここが最上階か？　まだ２時間経って無いと思うけど」
「最上階ですよ。つまりゴールです。お疲れ様でした。ちなみに中に入るとタイムがわかりますよ」
　とりあえず中に入ることにする。
「遅かったな！　３時間１７分待ったぞ」
　部屋の中央にグリフォンっぽい生き物が居た。近付いてみる事にした。
「ふむ。その剣を持っているということは、貴様が勇者だな。我輩は風の精霊の■■■■だ！」
「僕はショウマです。えっと、すみません名前が聞き取れませんでした」
「どうやら勇者の力を完全に覚醒出来ていないようだな。覚醒出来たらまた来るがよい！」

「分かりました。勇者の力を覚醒させてから来ます」
「ちょっと待て！　これをやろう」
　緑色の御守りを差し出してきた。
「これは何でしょうか？」
「これは風の御守り（小）だ。タイムアタックの報酬だ。もっと良いものが欲しければ素早くこの塔を登ることだな！」
　どんな効果が有るのかを聞いたつもりだったけれど。まぁいいか。そのうち分かるだろ。
「ありがとうございます」
「ここからエレベーターに乗って帰るといいだろう」
　精霊が横に移動するとエレベーターが上がって来た。扉が開いたのでそのまま乗る。
「ひとつ言い忘れていた」
「何でしょうか」
「良い滑り方だった！」
「……そうですか」
　扉が閉まり、エレベーターが動き出した。
「全部見られていたんだね」

「試練ですから、確認する人がいて当たり前ですよ」
「そうだね。人では無かったけどね」
　1～2分したらエレベーターが止まり扉が開いた。入口だった。
「どんな速度してるんだよこのエレベーター。速すぎじゃない？」
「気にしたらダメですよ」
「ところで、覚醒って何をすればいいの？」
「簡単に言えば、聖剣のレベルを上げればオッケーです」
「つまり周回しろと」
「はい」
「聖剣のレベルって5ぐらいまであったような気がするんだけど」
「とりあえず、レベルを1上げれば4つの試練は大丈夫ですよ」
「最終的には5まで上げないといけないって事だよね」
「そうですね」
「火の試練も意味ないなら今回は行かなくていいか。ということで、魔王のところに向かいたいと思うけど大丈夫かな？」
「大丈夫ですよ」
　じゃあ、まずは魔界に繋がる洞窟を目指して出発しよう。